

# 織豊系城郭以前

## 一 はじめに

近世社会の幕開けをどの時期に設定するかは、織田・豊臣政権に対する評価と関わる重要問題である。織田政権の性格については、まだ結論が出ているとはいえない。ただ、城郭研究において、信長の安土城を近世城郭への画期とすることは、大筋で認められるであろう。<sup>1</sup>石垣・瓦・礎石建築物の使用が、その指標として挙げられている。<sup>2</sup>しかし、安土城以後も、城郭が一斉に近世化したわけではない。織田勢力下でも同時期に、中世城郭の特徴を持つ城が築かれていた。また石垣や瓦など、個々の技術的特徴については、安土城以前の城郭にも部分的にみられる。<sup>3</sup>織田勢力においても、中世城郭からの築城技術の発展過程があったはずである。であるならば、安土城以前こそ問題としなければなら

ない。

## 多田 暢久

以上のような問題に答えるための視点の一つに、縄張りの分析がある。<sup>4</sup>城郭の縄張り研究は、一九八〇年代に急激に進歩した。<sup>5</sup>さらに、織豊期の発達については、編年を中心とした研究がある。<sup>6</sup>今回はその成果に基づき、織豊系独自の縄張り、出現期の様相について検討する。具体的には、織豊系縄張りの特徴を、出現期において同時期の周辺の城郭と比較してみたい。

まず編年研究の成果を整理しておく。織豊系城郭の編年は、虎口と呼ばれる城の出入口部分の発達を基準に設定されている。虎口については、直進して城内へ入る平入り（第1類型）と、ルートが一度曲がる虎口（第2類型）の段階を経て、虎口両脇の塁線が前後にずれ、二回屈曲して城内へ入る喰違い虎口（第3類型）へと進むとされる。た

だ、第1・2類型の虎口は、必ずしも織田系列独自のものではない。これは編年という作業の性格上、一般的な虎口の発展段階を織田勢力の城でも経てきたことを示すものである<sup>7)</sup>。織豊系城郭の独自性は、喰違い虎口の出現以降が問題といえる。編年上での喰違い虎口の初見は、永禄十年(一五六七)築城の岐阜城。以後の事例は、永禄十一年の信長上洛以降のものである。地域も畿内が舞台となる。織田氏も上洛以前は、他の戦国大名と比べ進んだ技術を使っていたとはいえない<sup>8)</sup>。尾張時代の事例が少ないので詳しくは不明であるが、織田方の城郭は畿内を掌握してから独自の縄張りの発展を遂げたとみることができよう。

さらに、編年では虎口の発達と堀・石垣の技術発達とを組み合わせ発展段階を把握する。堀は堀切から横堀へと発達していく。しかし、横堀の技術は虎口の出撃性を制約し、喰違い虎口とは両立しない。それが横堀を渡るための虎口専用の空間を有する第4類型の虎口を生みだしたとされる。第3類型から第4類型への発達へは、横堀の採用が深く関わっていた。

以上の研究から、縄張りのには横堀と喰違い虎口の採用、時期的には信長が上洛した永禄十一年前後、地域的には畿

内が問題として設定されよう。このうち地域については、大和を中心にみていきたい。

## 二 大和における信長上洛の影響

畿内においても、信長上洛は画期となった。永禄十一年九月二十六日、信長は足利義昭を奉じて上洛をはたす<sup>9)</sup>。当初は三好勢力の抵抗があったが、十月にはこれを排除し、「五畿内隣国皆以て御下知に任せらる」状況となる<sup>10)</sup>。

当時の大和では、松永久秀と筒井順慶が対立していた。筒井方には、久秀と不和になっていた三好三人衆が味方している。戦況は松永方に不利で、永禄十年には多聞城近くにまで三好・筒井方が迫っている。多聞城は、奈良における松永方の本拠であった。この時は、松永方の夜討ちにより大仏殿が炎上し、これにより辛うじて三好・筒井方を撃退している<sup>11)</sup>。

このようなか、上洛した信長に、久秀はいち早くよしみを通じた。永禄十一年十月四日には、信長と足利義昭に「面会し、「和州一國ハ久秀可為進退」と大和の支配を認められて<sup>12)</sup>いる。これに対し筒井方は、信長に従うべく上洛す

るが「尾州依無同心空下了」と取り付く島もない。<sup>13)</sup>ここに、松永と筒井の立場は逆転した。六日には郡山衆が松永方へ寝返り、筒井城の際まで松永久通が攻め寄せている。<sup>14)</sup>筒井城は史料に「筒井ノ平城」とあり、椿尾城に対し筒井氏の平野部における本城であった。<sup>15)</sup>八日には、筒井城が開城している。<sup>16)</sup>その後も、久秀は信長方より佐久間信盛、足利義昭方から細川藤孝・和田惟政の援軍を得て、筒井方の城を次々と落としていった。<sup>17)</sup>

十五日には筒井方の豊田城が落城。<sup>18)</sup>さらに、松永方は井戸城を攻めるため、井戸城の周囲に四カ所の足場の城「押城」を築く。落城後の豊田城は、この「押城」の一つとして利用されている。<sup>19)</sup>城主の豊田氏は、以後もしばらくは筒井方として井戸城に籠もっていたらしい。しかし、永禄十三年一月二十八日には、松永方に寝返ろうとしたのが露見して井戸城を出ている。<sup>20)</sup>元龜二年(一五七二)八月の辰市城合戦では、松永方の討ち死にの中に豊田の名がみえる。<sup>21)</sup>この合戦の敗北により、松永方は再び劣勢となっていく。さらに天正元年(一五七三)に久秀は、信長と対立した足利義昭に味方し、織田方に多聞城明け渡ししている。以後、久秀は大和と河内の境、信貴山城に逼塞する。天正五年に

は信貴山城が落城し、松永氏は滅亡した。<sup>22)</sup>

以上の流れをみると、松永氏の動向と織豊系縄張りの出現時期はある程度重なることがわかる。そこでまず、松永勢力の関わった城からみていきたい。

### 三 松永方の城の縄張り

前章でみた永禄期の大和の動向から、豊田城には松永方の改修が加わったと考えられよう。期間は永禄十一年から元龜二年までの間である。辰市城合戦では、豊田氏も松永方に味方して没落した。豊田城については、元龜二年以降の改修の可能性は低い。

豊田城(図1)は、天理市の市街地の北東に位置する。標高一九一メートル、平野部からの比高は約一〇〇メートルの山城である。城内は横堀により五つの地区に区分され、<sup>23)</sup>北側の長方形の曲輪が主郭と推定できる。南東の曲輪は主郭とほぼ同レベルで、さらに南東方向へと尾根が続く。尾根続きは一部で主郭よりも高い。にもかかわらず、横堀で囲むだけで曲輪などは確認できない。また、主郭東側の曲輪も、主郭に対し土塁を設け、相対的に独立性がある。

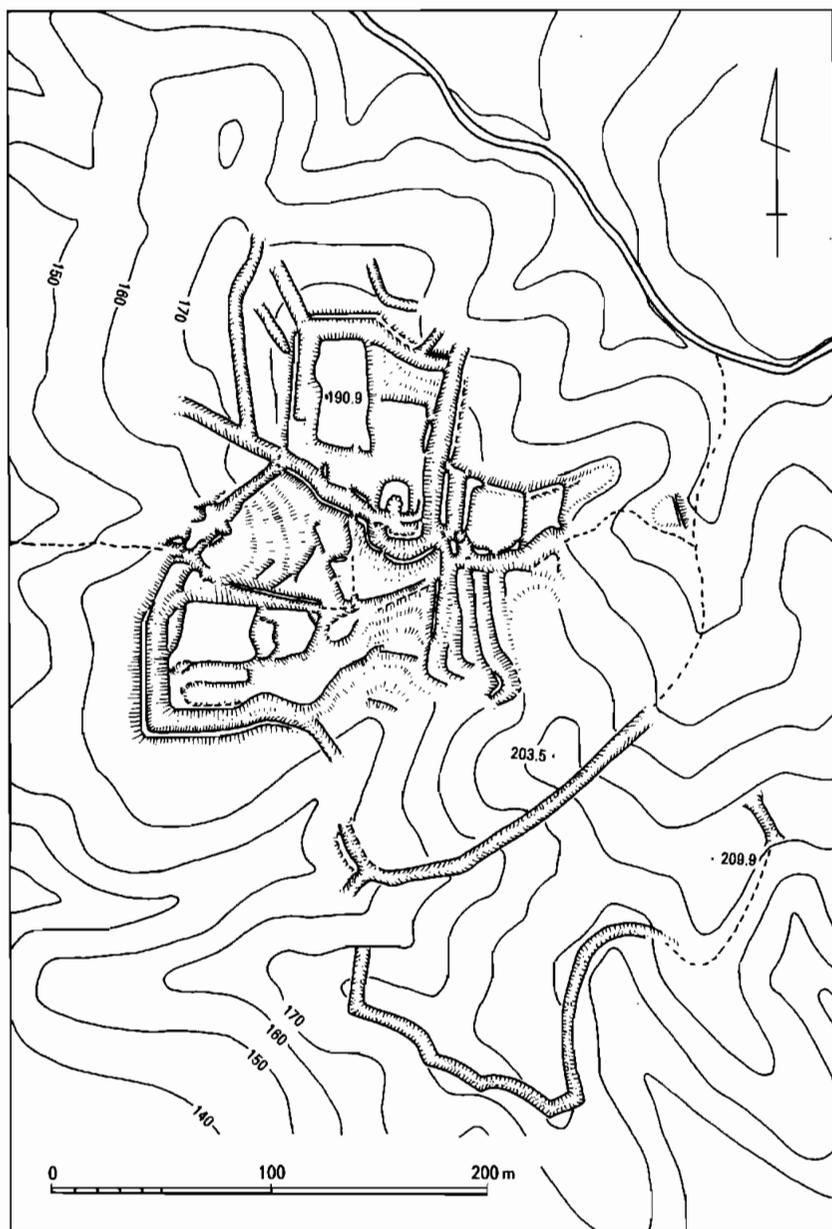


図1 豊田城（註23文献図を一部改変）

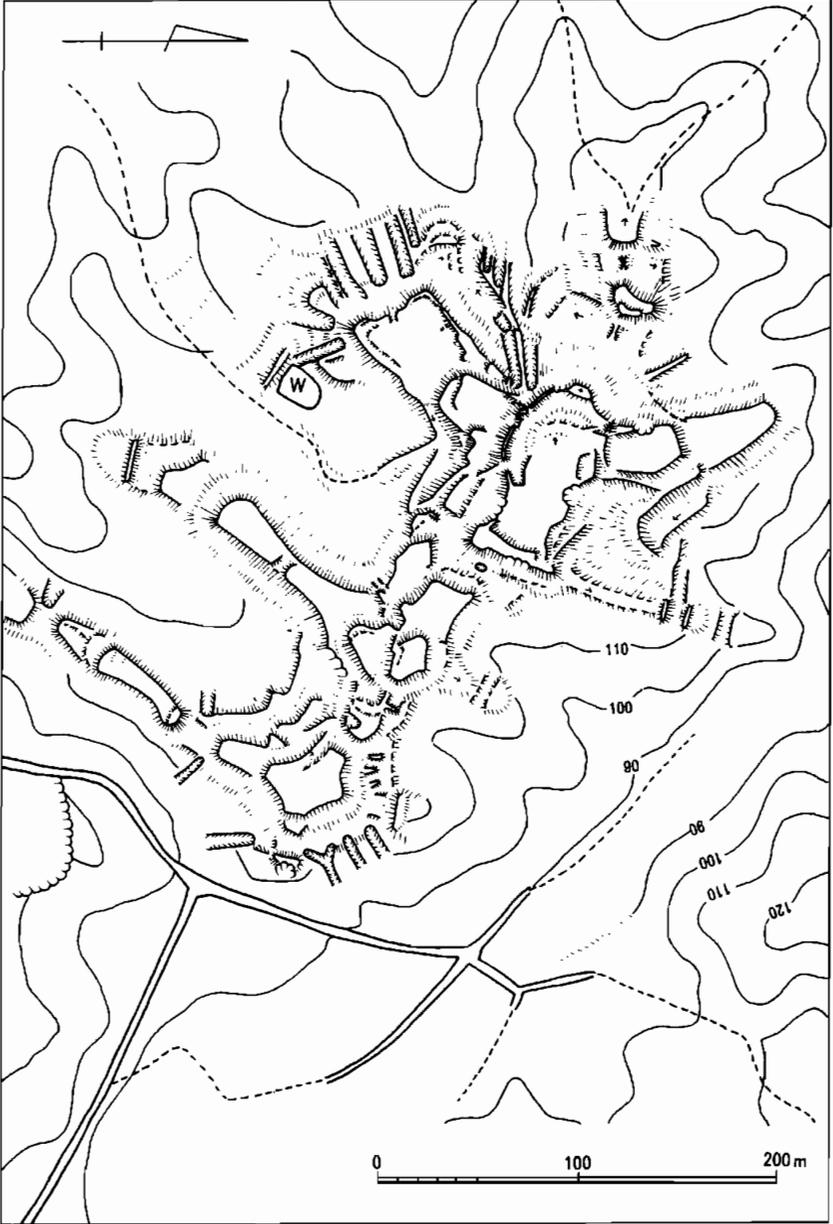


图2 鹿背山城

横堀については、かなりの規模のものを城域全体に巡らす。主郭の南西側では、谷地形を塞いで横堀を設定している。曲輪のない南東の尾根上も、広く横堀で囲い込む。ただ、横堀に掛かる横矢は確認できない。虎口の発達も十分で、明確にルートを推定できる虎口はみられない。一部では、堀底を通路とする。

豊田城の縄張りの特徴をまとめると、①主郭に対し相対的に独立性の高い曲輪があり、主郭の求心性は弱い。②発達した横堀が広域に城郭を囲い込み、防御ラインを画する。③虎口は明確でなく、喰違い虎口などもみられない。④横堀に掛かる横矢は確認できない。の四点である。

全体として、横堀の発達が突出しているといえる。織豊系城郭の編年により、同時期の織田方の城と比較しても、横堀の使用は進んでいるといえる。

他に、松永方の同時期の城としては、京都府木津町に所在する鹿背山城(図2)がある。『多聞院日記』によれば、信長上洛の直前、永禄十一年の九月十三日と十四日に多聞院の使者が鹿背山城に逃げ込んでいる。中井均氏は当時の多聞院と松永氏の関係から、このとき城が松永方であったと推定された。落城の時期については、天正二年とされる。

多聞城の北面の抑えといわれ、久秀が多聞城を築いた永禄三年頃には、すでに松永方が使用していたと考えられる。信長上洛以降の豊田城に比べ、鹿背山城は永禄初めから松永方の手が入っているとみられる。

城内の北西側、最高所に位置する曲輪が主郭である。主郭は東西に長く、南側と東側の一部に土塁を有す。南に向かい榊形状の虎口が開く。主郭の南東側には、主郭と同レベルの、やや独立的な曲輪がある。さらにその東の曲輪も、出丸状に独立している。主郭に対し、相対的に独立性の高い曲輪があるのは、豊田城と共通するといえよう。ただ、主郭に土塁を設けるなど、主郭の求心性強化にも努めている。虎口は主郭の榊形以外にも、土塁で両側を固めた虎口が確認できる。このあたりは、明確な虎口が確認できない豊田城より進んだ技術である。最終段階の改修によるものであろうか。

横堀はみられないが、堀切りから帯曲輪が横に続き、城域を画す。これにより防御ラインを設定するのも、豊田城と同思想と考えてよいであろう。しかし、鹿背山城では帯曲輪による城域ラインは、畝状空堀群と連続している。大和における畝状空堀群は、天文から永禄初めにかけて使用

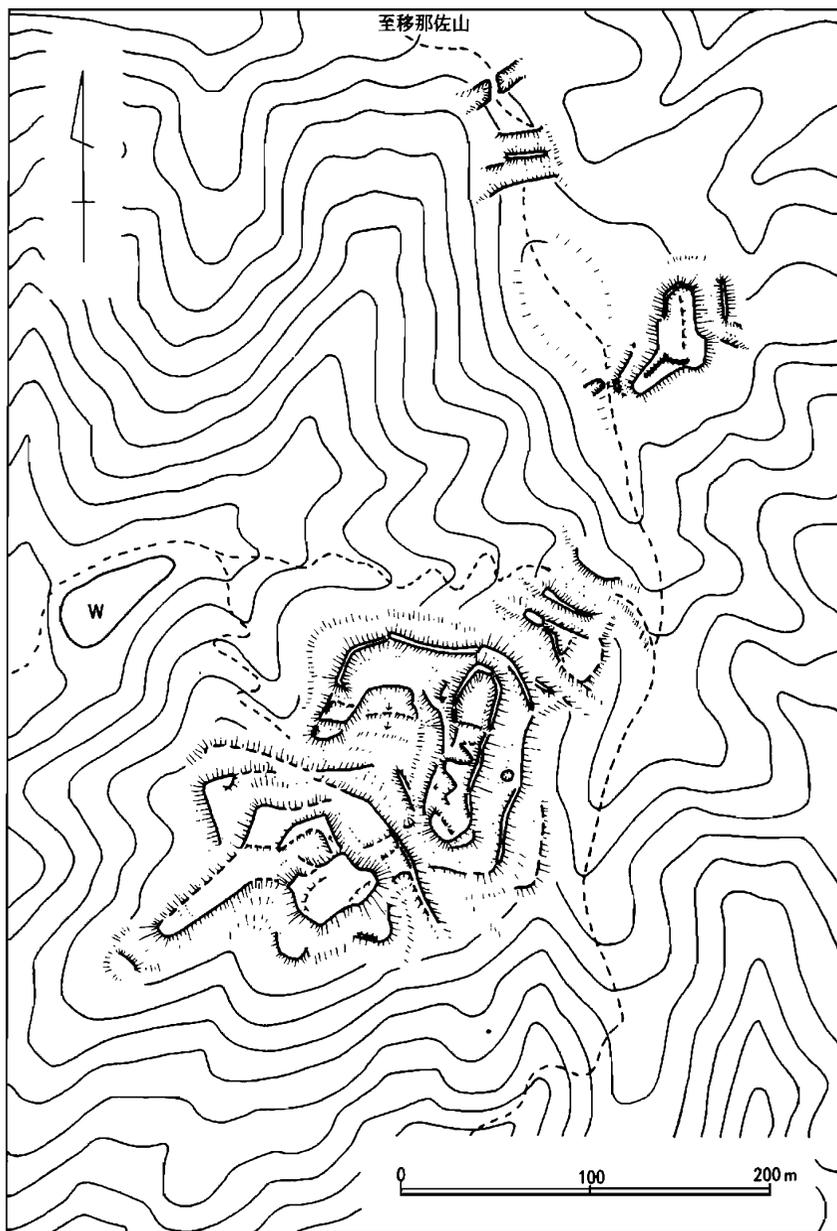


图3 沢城

された。<sup>26)</sup> 大和における松永勢力初期の、城域ライン設定の事例と評価できよう。

鹿背山城では、豊田城と共通する縄張りの特徴がいくつかみられた。一方で天正初年頃までの進んだ技術もみられる。これに対し、永禄初めに松永方の支配下に入り、永禄十一年までに松永方から離れた城として沢城(図3)がある。永禄三年、松永久秀は三好方として宇陀郡にまで攻め込んだ。この時、沢城や同じ宇陀郡の「日の牧城」は、久秀に攻められ開城している。<sup>29)</sup> このあと松永方の高山飛騨守が沢城に入った。<sup>30)</sup> その後、永禄十一年には沢氏が復帰しているの<sup>31)</sup>で、それまでに松永勢は退いたのであろう。復帰後の沢氏は、天正十年頃まで在城したらしい。<sup>32)</sup> ただ、縄張りには、宇陀郡内の他の城と異なっており、松永段階のものとみてよい。

沢城からは、北側に尾根が続く。その尾根上、城からかなり離れて堀切りを設ける。豊田城も城より高く続く尾根を広く堀で区画していた。さらに城は尾根続きを三重に掘切る。城内は、北南で縄張りの特徴が異なる。南側の最高所が主郭であるが、南側の曲輪ではほとんど土塁がみられない。一方、北側は土塁と横堀で曲輪を囲い込む。防御ラ

イン優位の縄張りで、逆に内部は曲輪としては不十分である。<sup>33)</sup> また、北側の曲輪の土塁は、一部で南側の曲輪に対しても設けられている。

沢城においても、豊田城や鹿背山城と同じく主郭に対して独立的な曲輪がみられ、主郭の求心性の弱さが指摘できる。また、虎口が明確でないのに、横堀など城域ラインのみが突出して発達していた。

#### 四 畿内における横堀の使用

前章で、大和において松永勢力が関わった城についてみてきた。検討した三城からは、松永方の城では横堀など城域を画する防御ラインが突出して発達していたと考えられる。<sup>34)</sup> 时期的にも、信長の上洛以前の永禄の初期から横堀を使用していた可能性が高い。一方、主郭の優位の確立や、曲輪の機能分化、虎口の発達は不十分であった。では、これらの特徴は、松永方の城だけのものであろうか。次に、やや範囲を広げて検討してみたい。

松永方と対立した筒井氏についてはどうかであろうか。永禄十年、根来衆と畠山勢が「サヒノ幸田ノ城」を攻撃し、

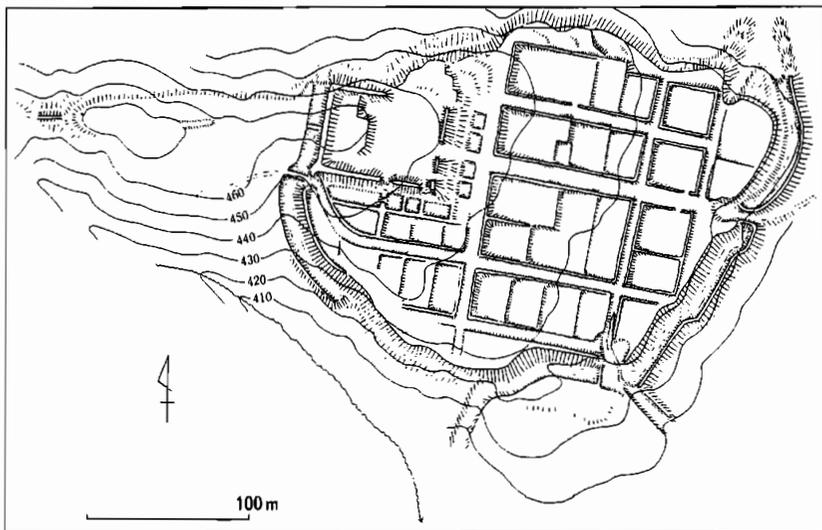


図4 佐味城（註36文献から）

撃退されている。当時は、筒井・三好方が多聞城に迫り、松永方は窮地に追い込まれていた。村田修三氏によれば、根来衆と畠山氏の動きは松永方を救援するためのもので、それを防いだ「幸田ノ城」は筒井方の最前線と考えられるとのことである。この「幸田ノ城」は、奈良県御所市に所在する佐味城（図4）と考えられている。

佐味城の縄張りを見ると、この城も横堀が巡り、城域を画す。虎口に対して横矢は効かないが、豊田城の横堀も横矢の折は確認できなかった。時期からみても、大和における横堀の使用を松永方だけの特徴とはいえない。永禄前半頃には大和において、横堀の技術が共有されていたと推定されよう。

さらに京都でも、永禄前期に足利義輝が対三好方の拠点として利用した如意岳城が、削平不十分な曲輪を横堀で囲んでいる。また、丹波で横堀を使用した城は、福知山周辺に多く分布する。これは、天文末から永禄前半にかけて丹波に侵攻した三好方の松永長頼の勢力範囲の外縁部となる。藤井善布氏は、横堀が松永侵攻の軍事的緊張により出現したと考えていた。この他、播磨においても横堀の突出した発達がみられる。

畿内における横堀は、永祿期前半に三好・松永の侵攻に伴う軍事的緊張のなかで出現したと考えられるよう。信長上洛以前に畿内近国では、すでに城郭における横堀の使用が、かなり広く行われていたのである。一方、虎口の発達や主郭の求心性強化、曲輪の機能分化は不十分であった。

## 五 おわりに

織豊系城郭の編年によれば、織田勢力の城で横堀を使用するのは、天正六年の伊賀丸山城からである。横堀については、織田方のほうが畿内の城郭から学んだのではないだろうか。最初にみた喰違い虎口についても、織田勢力のオリジナルではなく、朝倉氏の虎口技術であったのを織田方が採用した可能性が指摘されている。永祿十一年、信長が上洛した当時の織田勢力の城は、むしろ畿内の城の技術を取り入れながら発展していた。

しかし、畿内の横堀技術は、防御ラインのみの発達であった。横堀を巡らしながらも、主郭の優位性の確立や、曲輪の機能分化とは結びつかなかった。虎口の発達も、不十分である。播磨においても喰違い虎口の出現は、天正六年か

らの羽柴秀吉による三木城攻めの陣城まで待たねばならない。虎口の発達が遅れるのについては、横堀により虎口の出撃性が制約されるためとも考えられよう。つまり、城からの出撃性を高めるため、喰違い虎口を張り出させても、横堀を渡るときに敵の攻撃にさらされることになるのである。豊田城でも一部に馬出状の虎口があるが、結局はいったん堀底に降りねばならない。

これに対し、織田方の城ではその克服に虎口専用の空間を生みだす。この空間を横堀の対岸まで伸ばし、出撃機能を受け持たせた。いわゆる織豊系の馬出である(第4・5類型)。これ以降が、その独自性で織豊系城郭といえる。このように織田勢力の城は、畿内の様々な城郭技術を吸収しながら、さらにその弱点を乗り越えていく。織豊系城郭の発達は、自己完結的なものではなく、既存の技術の吸収とその再編を通じて行われていた。その総合性において安土城は、画期に位置するのである。

以上のような流れと、松永久秀をはじめ、上洛当初に信長が所領安堵した畿内勢力の没落の過程とは、重なって見えてくるが、これは今後の課題としたい。

註

- (1) 大類伸、鳥羽正雄『日本城郭史』(雄山閣、一九三六年)
- (2) 中井均「織豊系城郭の画期」(『中世城郭研究論集』 新人物往来社、一九九〇年)
- (3) 石垣については、近江観音寺城などで安土城以前に使用されている(北垣聰一郎『石垣普請』法政大学出版局、一九八七年・村田修三「観音寺城」『中世城郭事典』二、新人物往来社、一九八七年)。瓦についても播磨御着城など中世城郭の段階でもみられた(田中幸夫「播磨で活躍した室町・桃山時代の瓦工人集団」『播磨考古学論集』今里幾次先生古希記念刊行会、一九九〇年)。
- (4) 村田修三「戦国時代の城郭」(『歴史公論』一一五、一九八五年)
- (5) その画期に、村田修三「城跡調査と戦国史研究」(『日本史研究』二二一、一九八〇年)がある。
- (6) 千田嘉博「織豊系城郭の構造」(『史林』七〇一二、一九八七年)
- (7) 松岡進「書評 前川要氏著『都市考古学の研究』」(『中世城郭研究』6、中世城郭研究会、一九九二年)
- (8) 甲斐の武田氏は、永祿の末には馬出を使用していたとされる。

- (9) 『言継脚記』巻二十九、永祿十一年九月二十六日条。(『信長公記』巻一、では上落は九月二十八日、『多聞院日記』巻十四、では九月二十五日となっている。)
- (10) 『信長公記』巻一、永祿十一年十月二日条。(『多聞院日記』巻十四、では十月六日条に「山城・摂津・河内・丹波・江州悉以落居」とある。)
- (11) 『奈良市史』通史三(奈良市、一九八八年)
- (12) 『多聞院日記』巻十四、永祿十一年十月五日条。
- (13) 『多聞院日記』巻十四、永祿十一年十月五日条。
- (14) 『多聞院日記』巻十四、永祿十一年十月五日条。
- (15) 「平城」と「山ノ城」の関係については、村田修三「大和の「山ノ城」」(『日本政治社会史研究』下、塙書房、一九八五年)参照。
- (16) 『多聞院日記』巻十四、永祿十一年十月九日条。
- (17) 『多聞院日記』巻十四、永祿十一年十月十日条。
- (18) 『多聞院日記』巻十四、永祿十一年十月十五日条。
- (19) 『多聞院日記』巻十四、永祿十一年十月十九日条。
- (20) 『多聞院日記』巻十六、永祿十三年一月二十九日条。
- (21) 『多聞院日記』巻十七、元龜二年八月四日条。
- (22) 前掲註11
- (23) 村田修三「豊田城」(『中世城郭事典』二、新人物往来社、一九八七年)
- (24) 『多聞院日記』巻十四、永祿十一年九月十三・十四日条。  
十四日条は、「鹿山城」となっている。しかし、前日の記

事と併せて鹿背山城と考えて差し支えないであろう。

- (25) 中井均「鹿背山城」〔『中世城郭事典』二、新人物往来社、一九八七年〕

- (26) 中井均「木津の城」〔『木津町史』本文編二、木津町、一九九一年〕

- (27) 前掲註25中井論文。

- (28) 前掲註15村田論文。註6千田論文。

- (29) 「細川両家記」、永禄三年十一月二十四日条。

- (30) 村田修三「沢城」〔『日本城郭大系』一〇、新人物往来社、一九八〇年〕

- (31) 朝倉弘「近世」〔『榛原町史』本編、榛原町、一九九三年〕

- (32) 前掲註31。

- (33) このような、北と南の違いは、南側が高山氏以前の沢氏の城の影響を受けたためと考えられる。

- (34) 千田嘉博「大和における中世城郭総構の一考察」〔『城』一三、奈良大学城郭研究会、一九八四年〕

- (35) 『多聞院日記』卷十三、永禄十年九月五日条。

- (36) 村田修三「佐味城」〔『日本城郭大系』一〇、新人物往来社、一九八〇年〕

- (37) 村田修三「戦国期の城郭」〔『国立歴史民俗博物館研究報告』八、国立歴史民俗博物館、一九八五年〕。

- (38) 註37論文では、佐味城の横堀を天文の木沢長政によるものとしている。しかし、天文ではやや古くなる上、畝状空堀群との関係が合わなくなる。豊田城の例と比較しても、永

禄頃とするほうが整合的であろう。

- (39) 今谷明「如意岳城」〔『日本城郭大系』一一、新人物往来社、一九八〇年〕

- (40) 藤井善布「丹波地方の中世城郭について」〔『京都府遺跡調査報告書』三、京都府埋蔵文化財調査研究センター、一九八四年〕。

- (41) 福島克彦氏のご教示による。

- (42) 多田暢久「播磨河内城の縄張り」〔『歴史と神戸』一六一、一九九〇年〕

- (43) 村田修三「湖北の城館」〔『滋賀県中世城郭分布調査』六、滋賀県教育委員会、一九八九年〕。

- (44) 多田暢久「満久城の縄張りとその性格」〔『満久谷遺跡』奈良大学考古学研究室、一九八九年〕

- (45) 前掲註6千田論文。

(一九八八年・姫路市教育委員会文化課講師)